京城帝国大学と台北帝国大学の開設と哲学関連講座

―中国哲学を中心に

李　暁　辰

The Establishment of Keijō Imperial University, Taihoku Imperial University and the Philosophy Courses: Focusing on the Chinese Philosophy Courses

LEE Hyojin

Abstract

Keijō Imperial University was Japan's sixth imperial university and first imperial university to be built outside Japan proper. In 1928 Taipei Imperial University opened with two faculties, the faculty of literature and politics and the faculty of agriculture and science. In this paper I analyze modern Sinology at Keijō Imperial University in Seoul, Korea, and Taihoku Imperial University in Taipei, Taiwan during the Japanese colonial era. First I describe the mission, ideology, and roles of the first presidents of both imperial universities. Next I elucidate the characteristics that distinguish the organization of these imperial universities between 1872 and 1879 from other imperial universities. Finally, I discuss the professors who were in charge of courses on Chinese philosophy at both universities, including the structure of the courses and the human network involved. Using this approach of tracing the flow of modern academic knowledge of Chinese philosophy, I will follow the trends from the imperial universities of Japan to those of Korea and Taiwan.

キーワード：京城帝国大学、台北帝国大学、支那哲学、東洋哲学、植民地教育

はじめに

本稿は、日本の植民地であった韓国と台湾に設けられた京城帝国大学および北帝国大学において、近代的な中国哲学研究がどのように進められたのかを比較考察するものである。

日本は1926年、韓国ソウルに京城帝国大学を設立し、ついで1928年、台湾台北に台北帝国大学を設立した。これら京城帝国大学と台北帝国大学は、植民地時代に外地に建てられた帝国大学であり、それぞれ地域的特殊性を有していた。両大学は、当時韓国および台湾における最高学府としての権威を有し、活発な研究・教育活動を通して多くの業績を残した。終戦に伴ってその歴史は終わりを告げるが、以後、京城帝国大学は国立ソウル大学に、台北帝国大学は国立台湾大学として再編され、最高学府としての命脈をつなぐことになる。

京城帝国大学の初代総長は、当時東京帝国大学の支那哲学講座を担当していた服部宇之吉（1867-1939）である。服部は創設委員会の委員として、教員の任用と学風の確立に力を注いだ。一方、台北帝国大学の初代総長には幣原坦（1870-1953）が就任し、約10年間総長として指揮をとり、台北帝国大学の基盤を築いた。

近年、京城・台北帝国大学に関する研究は盛んになってきており、設立背景や学部の編成、教員・学生についてまで研究が拡大している[1)]。両大学の歴史については馬越徹の一連の研究[2)]によって詳細が明らかにされている。また、駒込武『植民地帝国日本の文化統合』（岩波書店、1996年）は日本帝国による植民地教育政策を分析・省察しており、阿部洋ほか、近代日本のアジア教育認識――その形成と展開――』（平成６・７年度研究費（総合Ａ）研究成果報告書、1996年３月）および『戦前日本の植民地教育政策に関する総合的研究』（平成４・５年度研究費（総合Ａ）研究成果報告書、1994年３月）、帝国としての近代日本の学知を再検討した『「帝国」日本の学知』（全８巻、岩波書店、2006年）シリーズもこれら植民地帝国大学を多様な対象・観点から検討している。

しかし、多くの先行研究は京城および台北帝国大学を植民地大学という枠組みの中で理解しようとする傾向があり、近代期における「知」の展開についてはあまり注目されてこなかった。

1）京城帝国大学全般に関する研究書は、정선이（丁仙伊）『경성제국대학연구（京城帝国大学研究）』（文音社、2002年）、『植民地権力と近代知識：京城帝国大学研究』（서울大学出版文化院、2011年）、永島広紀『戦時期朝鮮における「新体制」と京城帝国大学』（ゆまに書房、2011年）などが有益である。台北帝国大学に関する研究には『academia 台北帝国大学研究通訊』創刊号（台湾大学台湾研究社、1996年４月）、『academia 台北帝国大学研究』第２号（1997年５月）、鄭麗玲『帝国大学在植民地的建立与発展――以台北帝国大学為中心』（国立台湾師範大学歴史学系博士論文、2001年４月）、欧素瑛『伝承与創新――戦後初期台湾大学的再出発（1945-1950）』（台北：台湾古籍、2006年）などがある。

2）馬越徹『現代韓国教育研究』（高麗書林、1981年）、『韓国近代大学の成立と発展』（名古屋大学出版会、1995年）、「台北時代の幣原坦――台北帝国大学の創設と展開――」（阿部洋ほか『近代日本のアジア教育認識――その形成と展開――』1996年３月）など。

特に、植民地大学としての特色を有した朝鮮史や南洋文学などと比べて、哲学や倫理学の分野に関する関心はきわめて少ない。そこで、本論文では京城帝国大学と台北帝国大学を中国哲学の分野において比較検討したい。まず、両大学が持つ植民地大学としての使命と理念を紹介し、初代総長が果たした役割を考察する。次に、両大学の設立背景を検討し、学制編成において他の帝国大学とどのように違うのか、その特徴を明らかにする。さらに、両大学の中国哲学講座担当教員について調査し、どのような人的ネットワークで講座が構成されていたかを探りたい。これらの考察によって、中国哲学研究を中心とする近代学知の系譜を、日本―韓国―台湾の繋がりから読み取ることが可能になると思われる。

一、初代総長と設立理念

1. 初代総長とその役割

京城帝国大学の初代総長には当時東京帝国大学文学部の教授であった服部宇之吉が就任した。服部は福島県出身で、1890（明治23）年に帝国大学文科大学哲学科を卒業した。1898年に東京帝国大学文科大学助教授となった服部は、翌年同大学助教授専任となり、清国およびドイツ留学、1902年８月に帰国して東京帝国大学文科大学教授となり、文学博士号を取得した。ついで同年９月から1909年１月まで北京に滞在し、帰国後４月から東京帝国大学で中国哲学の講義を行った。1923年には京城帝国大学の創設委員会のメンバーとなり、1926年、開校と同時に初代総長に就任したのである。

服部の赴任は当時の朝鮮総督だった斎藤実の勧誘によるものであるが、斎藤総督に服部を推薦したのは、後に朝鮮語朝鮮文学講座の教授に就任した高橋亨だという説もある[3]。いずれにせよ、海外在留経験や優れた学問的活動などが評価されたと思われる。

服部は教員の任用について大きな影響力を有しており、赴任前の創設委員であった頃から積極的に教員を集めていた。その結果、支那哲学講座の藤塚隣（1879-1948）や英文学講座の佐藤清（1885-1960）らが開校時の教授として集められた[4]。支那哲学講座の例を挙げると、服部は後輩の藤塚を教員として招聘し当該講座の運営を任せた。藤塚はまた弟子並びに後輩である加藤常賢などを助教授として招き、支那哲学講座を支えた[5]。このように、服部が総長として在籍したのは一年あまりであったが、準備段階[6]を含めると５年にのぼる。服部が初期京城帝国大

3）服部武（服部総長・長男）「服部宇之吉の思い出」（『紺碧遥かに』、京城帝国大学同窓会、1974年）116-117頁。

4）佐藤清の教授任用課程については、『佐藤清全集』３巻（詩声社、1964年、258-259頁）を参照されたい。

5）服部と京城帝国大学支那哲学講座の教員との人脈については、拙稿「京城帝国大学の支那哲学講座と藤塚鄰」（『東アジア文化研究科院生論文』創刊号、関西大学大学院東アジア文化研究科、2013年１月）を参照されたい。

6）京城帝国大学は1923年（大正12年）の５月に建設が始まり、12月に「朝鮮帝国大学創設委員会」が設置

学の学風を作るのに大きく貢献したことは間違いないだろう。

一方、台北帝国大学の初代総長は幣原坦である。幣原は大阪府門真市出身で、1893年東京帝国大学国史科を卒業した。その後、東京高等師範学校教授であった1900年、韓国政府学部学政参与官となり、ソウルの新式学校である京畿中学校の教師として渡韓した。幣原は1906年に帰国するまで韓国史の研究を行う一方、教育においても活発な活動を続けた。帰国後も植民地教育に対する関心は変わらず、1911年に視学官として世界の植民地を訪問し、『殖民地教育』（同文館、1912）、『朝鮮教育論』（六盟館、1919）などを著した。このような経験を背景として、1928年台北帝国大学の初代総長として赴任した幣原は、南洋史学・土俗人種学など特色ある講座を含む文政学部や理農学部の経営にもあたった[7)]。

台北帝国大学の初代総長として幣原を推薦したのは、当時の台湾総督の伊沢多喜男（1869–1949）であった。伊沢は1924年の赴任時より論議されてきた帝国大学建設をさらに推進し、友人であった幣原に台北帝国大学の設立を一任したのである。そして、幣原の後輩である東洋史学者の藤田豊八（1869–1929）が初代文政学部長として招聘された[8)]。服部が約一年で総長の職をおりたのに対し、幣原は約10年間台北帝国大学の総長として指導的立場にあったことを考えると、幣原の方が教育システムや行政などにより深く関係していたと考えられる。

服部と幣原の共通点は、豊富な教育経験及び欧米への留学経験を有すること、そして、設立時の教員任用に強い影響力を有していたことが確認できる。服部と幣原の教授選任の過程は個人的に行われていたようである。二人は、学術的に優れた学者を招くためにみずからの人脈を十分活用し、必要に応じて優秀な学者を調べ、広く人材を呼び集めた。また、彼らが招いた教員たちは、さらに自分の弟子や後輩を京城・台北帝国大学に招き、教員採用のルートを拡張していった。

2. 植民地帝国大学の使命

新しい大学を創設するにあたり、二人の総長に与えられた使命は、植民地大学としての特色を明確に打ち出せるような授業や研究の基盤を整備し、それに相応しい教員を招聘することであった。服部は京城帝国大学の始業式において、京城帝国大学の使命を次のように述べている。

> 内地に於ける帝国大学は各々多少の特長を有つて居る本学は朝鮮に在るの故を以て当然に有つべき特色が有ると思ふ其は朝鮮の地が古より一方には支那又一方には内地に対して有

された。朝鮮帝国大学創設委員会のメンバーには、湯浅創平（総督府政務総監）、服部宇之吉、志賀潔、吾孫子勝（委員）、荻原彦三（幹事）、高橋亨（総督府視学官）などが任命された。

7）『日本近現代人名辞典』（吉川弘文官、2007年）501頁。幣原の初期台北帝国大学運営については李恒全「台北帝国大学設立計画案に関する一考察」（『神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要』第一巻第一号、2007年）を参照されたい。

8）「先学を語る ── 藤田豊八博士 ──」（『東方学』第63輯、1982年）。

した関係の深い事に依つて生ずるものである今他の事項は暫く措いて文化の関係を以て云ふても内地の文化に関する問題で其の解決には朝鮮の研究に依つて光明を与へられるものが少くないし、朝鮮の文化に関する問題は概ね支那の研究に依つて闡明されると思ふ……一方には支那との関係又一方には内地との関係を以て広く諸方面に互つて朝鮮の研究を行ひ東洋文化研究の権威となると云ふことが本学の使命であると信じて居る能く此の使命を遂行せんとするには日本精神を原動力と為し日新の学術を利器と為して進まねばならぬ此くの如くにして内は朝廷興学の盛意に副ひ奉り外は世界文化の進歩に貢献することが出来ると信ずる大学令第一条ニ曰ふ。

大学は国家に須要なる学術の理論及応用を教授し並其の蘊奥を攻究するを以て目的とし兼て人格の陶冶及国家思想の涵養に留意すべきものとす。

と今朗読した大学令第一条に特に反復明言されてある国家と云ふ二字は諸子の常に念頭に存ずべきものである[9)]。

服部は、京城帝国大学は日本の「大学令」に即したうえで、他の帝国大学とは異なり、「東洋文化研究ノ権威トナルト云フコト」を大学の使命とすると宣言している。「東洋文化研究」を大学の使命とするのは中国史・中国哲学研究者の服部としては当然の主張であり、これに呼応する形で朝鮮史学や朝鮮語学・朝鮮文学講座が設置されることになった。

また、幣原も「台湾の学術的価値」において、台湾における学術研究が有する可能性と重要性について次のように力説している。

実に南方文明の究査は、時代の要求ともいふべきである。而してこの究査に最も便宜なところとして、ここに台湾が横張っているのである。

台湾は、日本の領土中、一歩南洋に踏歩している唯一の足場である。さうして人文科学の上にも、自然科学の上にも莫大な価値を示している。台湾は、熱帯に踏出ている上に、垂直的には、温帯はおろか、更に寒帯にまで手を延ばしている。それ故植物学・動物学・医学・気象学・その他百般の自然科学の研究には、或點に於て、世界に類例稀なる好対象を提供している。

更にこれを地平線的に観察すると、東には太平洋とその民族があり、西より南にかけては、南支南洋の錯雑せる民族がある。台湾は、これ等の民族の中間に介在して、諸種の文化を包容している。而して日本国民が、この地を開発すべき位置に立って、学術的究査を進めて見ると、中には上代の旧友に邂逅するやうな感を生ずることがある。かくして台湾は、民俗学・言語学・文学・史学・その他あらゆる人文科学の研究にも、また得難い好対象を

9)「京城帝国大学始業式に於ける総長訓辞」（『文教の朝鮮：京城帝国大学開学記念号』６、朝鮮教育会、1926年）３－４頁。

提供しているのである[10]。

幣原は台湾の地域的特性を他方面に活用できると主張し、自然科学から人文科学に至るまでこの地域的特性を生かし、日本では得られない結果を手に入れることができると考えた。このような使命に符合するように、文政学部には、東洋哲学や東洋倫理学などほかに南洋史学講座も開設され、理農学部には農学・熱帯農学講座など既存の帝国大学には見られない講座が開設されることとなった。

二、設立の背景と名称

1. 設立の背景

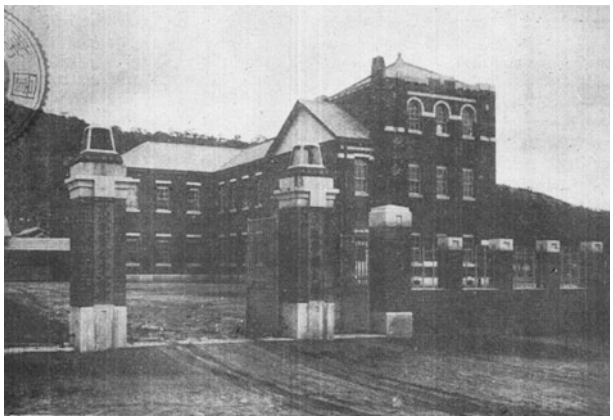


図１　京城帝国大学の学舎[11]

京城帝国大学は日本が六番目に設立した帝国大学であり、初めて外地に開設された帝国大学であった。韓国に京城帝国大学が設立された理由として、馬越は①総督府の政策転換があったこと、②1918（大正７）年日本で「大学令」が制定され、高等教育機関の拡張計画が主張されるようになったこと、③韓国国内における大学設立運動や海外への留学生激増などに見られる韓国人の高い教育熱、④在韓日本人たちの高等教育機関設立の要求を挙げている[12]。

京城帝国大学は日本の「帝国大学モデル」[13]を導入し、1924（大正13）年に予科（２年）が発足し、２年後の1926年、第一回予科生の大部分が卒業と共に本科に進学する形で本科の発足と

10）幣原坦「台湾の学術的価値」（『台湾時報』12月号、台湾総督府台湾時報発行所、1926年）25-26頁。
11）『文教の朝鮮：京城帝国大学開学記念号』６（朝鮮教育会、1926年）。
12）馬越徹『韓国近代大学の成立と発展』（名古屋大学出版会、1995年）100-142頁。
13）前出馬越徹『韓国近代大学の成立と発展』、105頁。

なった。本科は法文学部と医学部からなっており、1941（昭和16）年に理工学部が開設された。しかし、本科が二つないし三つの学部だけで構成されるというのは、他の帝国大学と比較すると異例であり、総合大学としては学部数が少なかった。

1926年の発足時に開設された各学部の講座は、法文学部23講座（法学関係４講座、文学関係19講座）、医学部12講座であった。第一期入学生は法文学部79名、医学部65五名であった[14]。卒業生は1929年（昭和４年）から1942年（昭和17年）までで日本人1219名と韓国人727名の、合計1946名であった[15]。日本人と韓国人の比率はほぼ２：１であり、日本人の中でも在韓日本人と日本からの留学生が１対１の比率であった。法文学部の卒業生はその後、官僚、学校教員、銀行、会社員などとして活躍した[16]。

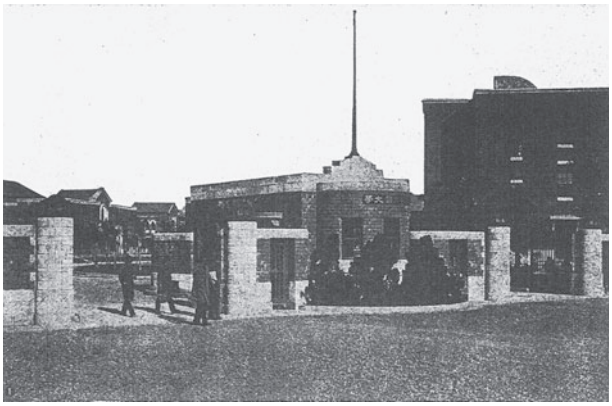


図２　台北帝国大学の学舎[17]

台北帝国大学は、日本が七番目に設立した帝国大学である。台北帝国大学の設立の事由については、①新台湾教育令（1922）により、「大学教育及其ノ予備教育ハ大学令[18]ニ依ル」（第10条）と規定され、法的に大学への道が開かれたこと、②第一次世界大戦後の民族運動の世界的高まりの中で、台湾人の教育熱が飛躍的に高まり、日本留学熱も高まっていたこと、③台湾在住日本人子弟が増加したこと[19]が挙げられる。

14）『京城帝国大学一覧』（京城帝国大学、1927年）88-91頁。
15）『京城帝国大学一覧』（京城帝国大学、1943年）283頁。
16）정선이（丁仙伊）『경성제국대학연구（京城帝国大学研究）』、152-153頁。
17）『芝蘭―台北帝国大学予科50周年記念』（台北帝国大学予科五十周年記念誌編集委員会、千葉：東京印書館、1994年）。
18）1918年に公布された大学令を指す。
19）馬越徹「台北時代の幣原坦―台北帝国大学の創設と展開―」（阿部洋ほか『近代日本のアジア教育認識―その形成と展開―』1996年３月）から抜粋。

台北帝国大学は1928年に文政学部と理農学部の二学部体制で開校し、1936年に医学部を設置、1943年には理農学部が理学部と農学部に分離し、さらに工学部が設置された。文政学部には哲学科・史学科・文学科・政学科の４学科12講座が置かれた。1925年、台北高等学校に高等課が設けられていたため、京城帝国大学のように予科は設立されなかったが、学生不足を打開するため、1941年に予科が新設された。また地域的特殊性を生かして、1939年に熱帯医学研究所、1943年に南方人文研究所と南方資源科学研究所など次々と研究所が設置された。

第一期入学生（1928年入学）は文政学部19名（日本人16名、台湾人３名）、理農学部36名（日本人33名、台湾人３名）であった。1943年の資料によると、文政学部の卒業生は323名であったが、そのうち台湾人は50人に過ぎなかった[20]。このように、入学時から台湾人の学生が少ない現象が続いていたことがわかる。また文科の場合は東京帝国大学や京都帝国大学など、日本内地の大学へ進学する台湾人の学生が多かった[21]。卒業後は日本人の場合、政府官僚および大学の教職に就き、台湾人は医者・弁護士などになった[22]。

このように、両大学は外地に設立されたのにもかかわらず、教員も学生もほとんどが日本人であった。京城帝国大学ではまだましであったが、それでも日本人と韓国人の学生比率は２：１であった。また、入学試験は日本人・韓国人の区別なく誰でも受験資格があったが、日本語の作文や古文などの試験科目が韓国人にとっては不利であったことは間違いない。台北帝国大学ではこのような状況はさらに深刻で、試験に合格できる台湾人学生は極めて少数であった。その結果、台北帝国大学の予科に相応する台北高等学校において日本留学を選択する学生は減少しなかった[23]。結局、現地の学生と内地の学生は平等な立場に立つことができなかったのである。京城帝国大学の第一期卒業生である兪鎭午は、このような限界について「京城帝国大学が朝鮮に建てられたのは事実であるが、朝鮮人を教育するための機関であったとは言いがたい」[24]と指摘している。

このことに関しては、京城帝国大学と台北帝国大学がともに研究機関としての側面が強かったことも影響していると考えられる。服部と幣原の大学設立の抱負からも読み取れるように、地域的特性を生かした学術的成果をあげることも、外地に帝国大学が設立された理由の一つであった。台北帝国大学が南中国や南洋への強い関心をもつ、亜熱帯進出のための研究センター

20）「大学卒業生氏名」『台湾帝国大学一覧』（京城帝国大学、1943年）。

21）歐素瑛著、지관순訳「台北帝国大学 学生의 出身学校와 進路（台北帝大生的來源與出路）」（『역사문제연구』26、2011年）124-128頁。この研究によると、他の学部も同じ状況で、台湾の学生比率が高かったのは医学部のみだったという。

22）前出歐素瑛著、지관순訳「台北帝国大学 学生의 出身学校와 進路（台北帝大生的來源與出路）」、112頁。

23）前出歐素瑛著、지관순訳「台北帝国大学 学生의 出身学校와 進路（台北帝大生的來源與出路）」、127-128頁。

24）이충우（李忠雨）『京城帝国大学』（다락원、1980年）55頁。

であっとことはこれまでも指摘されてきた[25]。これについては、学生の数が帝国大学の中で最も少なかったのに対して教員の数が非常に多かった点からも、台北帝国大学が学術研究に重点を置いていたことがわかる。

2. 名称の問題

京城帝国大学の名称は当初「朝鮮帝国大学」という名称が有力候補として挙げられたが、「朝鮮」の大学と取られる可能性があるので、最終的に京城帝国大学に修正されたことは広く知られている[26]。台北帝国大学も同様の問題を抱えていたようである。当初「台湾帝国大学」という案が提示されたが、「台湾帝国」の大学という意味に誤解される可能性があり、日本国内の帝国大学の名称と一致させるため最終的に台北帝国大学と修正された[27]。

学部編成においては、日本国内の状況との差異によって議論が生じた。京城帝国大学には、法文学部と医学部が設置されたが、法文学部の設置について議論になったことがある。

> 次に京城帝国大学に於ける学部の選定に付ては開学の当時相当論議せられ、今日尚論議せられつゝあるのであるが、その論議の中心は京城帝国大学が理農又は理工科を缺いて、法文学部を選んだ點に在るのである。由来朝鮮の民衆が法律・経済等政治方面に絶対的な志向を有し、理農工等自然科学方面に極めて不熱心なことは第一章朝鮮教育の歴史的背景瞥見中朝鮮の貧弱の項に於て述べた通りであって、折角理農学部又は理工学部を設けても適当な入学志願者を得ず、一方法文学部を缺いたが為に依然として内地又は海外の大学に学生を送らしむるやうなことゝ為っては大学開設の意義を消さゞる結果となるのであって、医学部の他先づ法文学部が探せ定られたことも亦当然なりと云はざるを得ないのである[28]。

学術的成果や実務的人材を養成するためには、理農もしくは理工科の設置が優先されるべきであったが、それでは韓国人の学生が入学しなくなると判断し、最終的に法文学部を設置することになったのである。韓国人のエリートの海外流出を防ぐことも考慮された。韓国人学生を包容する学部編成であった。

台北帝国大も設立課程や学制において京城帝国大学の場合とかなり類似している。幣原の回想によれば、台北帝国大学では当初文政学部と理農学部を設置する際、次のような議論があった。

25）Patricia Tsurumi、*Japanese Colonial Education in Taiwan, 1895–1945*（Sophia University、1978年）123頁。

26）京城帝国大学創立五十周年誌編集委員会編『紺碧遥かに』（京城帝国大学同窓会、1974年）16頁。

27）松本巍撰・劒通林訳『台北帝国大学沿革史』（1960年）１頁、幣原坦・永島広紀編集『文化の建設――幣原坦六十年回想記』（ゆまに書店、2010年）113頁。

28）大野謙一『朝鮮教育問題管見』（朝鮮教育会、1936年）143頁。

十月九日、いよいよ総督公室に於て第一回大学創設会議が開かれた。伊沢（多喜男）総督いう「学問の基本ともなるべき理学部と文学部とから始めてはどうだろうか」と。総務長官いう「台湾の状現から考えると、理・文両学部のみでは、卒業生の用い処にも行詰り結局大学設立の効果が薄弱とならぬでしょうか」と。なかなか議論が決しない。

そこで私は更に折衷的の一案を考え、理科に加うるに農家を以てし、文科に加うるに法科を以てしては如何といった。……台湾青年の希望する所法科が多く、台湾の大学に法科がなければ、却て他地方に散出して、悪化して帰るかも知れない。その時になって法科を置くよりも、今から之を用意しておく方がよいと考えたのである。

大体それで総督の意も落着いたが、更に翌十日及び十一日に亘って、熟議を遂げ、総督は「法科といっても、所謂法律屋を造らず、法文学科となる以上は、東洋道徳学を総ての物に学ばしめて、従来の漢学の筋を曳かしめようではないか」といわれるに至って、それで文政学部とでもしようかということになった[29]。

このように、幣原は「台湾青年」の希望を考慮して理農学部の他に法科を設ける折衷案を示し、法文学部を開設すべきだと主張している。伊沢総督はそのことを考慮しつつ、「東洋道徳」にかかわる伝統的漢学を継承するのがよいとして最終的に文政学部に落ち着いたという。

両帝国大学における法文学部および文政学部の具体的な講座は次のとおりである。

【表１】　京城帝国大学法文学部の開設講座[30]

憲法、行政法	教育学
民法民事訴訟法	社会学
刑法刑事訴訟法	国史学
経済学	朝鮮史学一
政治学政治史	朝鮮史学二
羅馬法	東洋史学
哲学哲学史	国語学・国文学
支那哲学	朝鮮語学朝鮮文学一
倫理学	朝鮮語学朝鮮文学二
心理学	支邦語学支邦文学
宗教学宗教史	外国語学外国文学
美学美術史	

【表２】　台北帝国大学の文政学部の開設講座[31]

憲法	西洋文学
行政法	国史学
政治学政治史	東洋史学
法律哲学	南洋史学
経済学一	東洋哲学
経済学二	哲学哲学史
民法民事訴訟法	東洋倫理学
刑法刑事訴訟法	西洋倫理学
国語学国文学	心理学
東洋文学	教育学教育史

29）前出幣原坦・永島広紀編『文化の建設』、107-109頁。

30）『京城帝国大学一覧』（京城帝国大学、1927年）。

31）『台北帝国大学一覧』（台北帝国大学、1929年）。台北帝国大学の場合、開校時（1928年）の講座は12講座に過ぎず、翌年の1929年に南洋史などの特殊性を持つ講座が設置されたため、1929年の資料をもとに作成した。

ここに見るとおり、法文学部と文政学部とで学部の名称は違うが、大筋は類似の講座が開かれていた。しかし、京城帝国大学の「朝鮮史」「朝鮮語学文学」講座や台北帝国大学の「南洋文学」「南洋史学」「東洋倫理学」講座などが設置されていることから日本国内の帝国大学では見られない特徴を確認することができる。「朝鮮」と「南洋」に関する講座が地域的特性を生かしたものであることはいうまでもないが、注目されるのは「東洋」という用語である。台北帝国大学では、支那という用語は使われず、代わりに「東洋」の語が使われている。たとえば、京城帝国大学では「東洋史学」講座のみ東洋という用語がみられるが、台北帝国大学の場合、「東洋文学」「東洋哲学」など京城帝国大学が「支那」と表記している部分がすべて「東洋」になっている。また、京城帝国大学にはない「東洋倫理学」講座が新設されている。

しかし、当時「東洋史」という講座名は広く使われていたものの、「東洋哲学」や「東洋倫理学」の講座名は一般に使われる用語ではなかった。当時中国哲学の講座が開かれていた帝国大学と東洋大学における講座名を見てみよう。

【表３】　各大学の中国哲学講座名[32)]

大学名	講座名
東京帝国大学[33)]	支那哲学・支那文学講座
京都帝国大学[34)]	哲学哲学史第三講座（支那哲学）[35)]
東北帝国大学[36)]	支那学講座（二）
京城帝国大学	支那哲学講座
台北帝国大学	東洋哲学（支那）
東洋大学	東洋哲学（支那・印度）

表３からわかるように、東京帝国大学の場合「支那哲学・支那文学講座」を開設しているが、この講座名は京城帝国大学が「支那哲学講座」と「支那文学講座」を開設していることと対応している。また各帝国大学によってそれぞれ名称の差異はあるが、基本的に「支那」という用語で中国哲学講座を開いている。ただ、当時、「東洋」という用語で哲学講座を開設していた大学には、私立東洋大学がある。東洋大学は、1905年の学則改正を通して、大学部の既存の「漢文及び支那哲学」と「印度哲学」学科を「国語漢文」と「東洋哲学」学科に再編成した。すなわち文学と哲学を分離して漢文を「国語漢文」におき、支那哲学を印度哲学と合わせて「東洋

32）『京城帝国大学一覧』（京城帝国大学、1943年）により作成。
33）『東京帝国大学一覧』（東京帝国大学、1930年）により作成。
34）『京都大学文学部五十年史』（京都大学文学部、1956年）55-85頁。
35）哲学講座は第六講座まであって、担当科目は次のようである：哲学哲学史第一講座（哲学）、第二講座（印度哲学）、第三講座（支那哲学）、第四・五・六講座（西洋哲学）。
36）『東北帝国大学一覧』（東北大学、昭和３年～５年）。

哲学」という学科に再編成したのである[37]。

しかし、台北帝国大学に印度哲学講座はなく、東洋哲学講座の内容は他の帝国大学と同様に支那哲学であった。それにもかかわらず幣原は「支那哲学」ではなく、「東洋哲学」として講座を開設した。幣原はこのような「東洋」という用語の採用について次のように説明している。

> そこで文政学部に於いては、従来の大学に無い南洋史学や土俗人種学を加え、心理学の如きも、民族心理学を中心とし、言語学でも、資料を東・南両洋の言語に採り、倫理学も西洋倫理学を講ずる従来の型を破って、東洋倫理学を配合する。そうして之を、政学科の学生にも必須かもくとして聞かせしめる。又これまで支那哲学・支那文学などと呼び来った「支那」を、「東洋」に改め、眼を東洋一般に注がしめる。政治・法律の学も、資料を東洋に採るという風尚を起す。
>
> 理農学部に至っては、総ての学科が、台湾を中心とする熱帯・亜熱帯の対象に依って研鑽するのであるから、既設の大学とは全く趣を異にする。
>
> 要するに、台湾の大学は、東洋・南洋及び熱帯の諸研究に於て、大なる特色を発揮することにしよう[38]。

なぜ幣原は「支那」を改めて「東洋」を用いたのか。当時の東洋という用語の概念は、中国を相対化するための概念として作られ、使用された。また、そこには「日本」や「日本史」が含まれず、日本史は国史として別途に考えられた。つまり、「東洋」は中国を相対化することから、広範囲な意味では日本と他のアジアと区別するための用語でもあった[39]。『大漢和辞典』では、「東洋」を次のように説明している。

> 東洋[40]
>
> ①東方の海洋。東海。
>
> ②黄海をいう。東海。
>
> ③西洋に対していう語。日本・中国及び亜細亜洲の東部にある国の汎称。
>
> ④中国人が専ら日本の称する語。
>
> ⑤山脇尚徳の号。

37）東洋大学創立百年史編纂委員会・東洋大学井上円了記念学術センター編集『東洋大学百年史』通史編１（東京：東洋大学、1993）569-590頁。

38）前出幣原坦・永島広紀編『文化の建設』、111-112頁。

39）濱下武志「동아시아 地政文化는 성립하는가（東アジアの地政文化は成立するのか）」（『大東文化研究』63、2008年）65-66頁。

40）諸橋轍次『大漢和辞典』（縮写版）巻六（東京：大修館書店、1976年）197頁。

東洋の用語は少なくとも18世紀末から東北アジア、東南アジア、印度を含む地域概念として使われていたものであった（①、②）[41]。この地域概念としての東洋が、明治初期の日本において西洋に対するアジアを意味することになった（③）[42]。さらに、日本のアジア政策と結び付けられ、「アジア主義」「大アジア主義」「大東亜」などの広域統治を表現するようになった。そして政治・軍事だけではなく、大学の学問部類や学科分類にもそれが反映された。台北帝国大学での「南洋」「南方論」講座設置の事例は典型的な例であって、東洋史の一部として南洋史の研究を試みたのである[43]。幣原は、「支那」を「東洋」に変えることによって、意識的に支那（中国）を相対化して「東洋」概念の中に再編成したのである。

三、哲学関連講座の教員

前述のように、京城・台北帝国大学の教員の多くは日本国内から招聘されて赴任した。また、総長及および講座担当教授の人脈を基盤として後任教授や助教授が招かれた。本章では、どのような背景を持った人物が教員となったのかを具体的に考察したい。

京城帝国大学と台北帝国大学において哲学講座を担当していた人物は次のとおりである。

【表４】　京城帝国大学の哲学関連講座の教員（「助」は助教授、以下同じ）[44]

講座名	担当教員（期間）	生没年および出身大学
中国哲学講座	藤塚鄰 （1926-40）	1879-1948 東京帝国大学哲学科（支那哲学）卒業（1908年）
	高田眞治 （助・1926-27）	1893-1975 東京帝国大学支那哲学科卒業（1920年）
	加藤常賢 （助・1928-33）	1894-1978 東京帝国大学支那哲学科卒業（1920年）
	本多龍成 （助・1935-40）	不明 東京帝国大学支那哲学科入学（1926年）
	阿部吉雄 （助・1941-43）	1905-1978 東京帝国大学支那哲学科卒業（1928年）
哲学・哲学史第一講座	安倍能成 （1926-38）	1883-1966 東京帝国大学哲学科卒業（1909年）
	田邊重三 （1940-43）	不明 東京帝国大学哲学科卒業（1919年）

41）박훈「18세기후반―幕末期 일본인의 '아시아' '동양' 개념의 형성과 변용（18世紀後半―幕末期日本人の「アジア」「東洋」概念の形成と変容）」（『東洋政治思想史』Vol.9 No.2、2010年）96頁。

42）現代の中国では、「東方」を用いてアジアを指しており、「東洋」は日本を意味する言葉と認識されている（④）。

43）前出濱下武志「동아시아 地政文化는 성립하는가（東アジアの地政文化は成立するのか）」、71頁。

44）『京城帝国大学一覧』（京城帝国大学、1943年）により作成。

哲学・哲学史第二講座	宮本和吉 （1928-43）	1883-1972 東京帝国大学哲学科卒業
倫理学第一講座	島本愛之助 （1926-30）	東京帝国大学哲学科卒業 のちカリフォルニア州立大、シカゴ大学哲学科で修学
	安倍能成 （1932-39）	哲学・哲学史第一講座と兼任
	小島軍造 （1938-43）	1901-不明 東京帝国大学倫理学卒業
倫理学第二講座	白井成允 （1928・31-38）	1888-1973 東京帝国大学哲学科（倫理学）
	宮島克一 （1940-43）	不明 東京帝国大学倫理学卒業（日本道徳史）

【表５】　台北帝国大学の哲学関連講座の教員[45)]

講座名	担当教員（期間）	生没年および出身大学
哲学・哲学史	務台理作 （1928-34）	1890-1974 京都帝国大学文科哲学科に入学（1915年）
	岡野留次郎 （1935-43）	1891-1979 京都帝国大学文科大学哲学科卒業（1916年） 1942台北帝国大学文政学部長
	淡野安太郎 （助・1928-1943）	1902-1967 京都帝国大学哲学科卒卒業
東洋論理学 西洋論理学	世良壽男 （1928-43）	1888-1973 京都帝国大学文科大学哲学科入学（1914年）
	今村完道 （1935-40）	東洋哲学と兼任
	柳田謙十郎 （助・1929-40）	1893-1983 京都帝国大学文学部哲学科選科に入学（1922年）
東洋哲学	今村完道 （1928-43）	1884-不明 東京帝国大学文科大学支那哲学科卒業（1912年）
	後藤俊瑞 （助・1928-1943）	1893-1961 東京帝国大学支那哲学科卒業（1924年）

ここからわかるように、京城帝国大学の哲学関連講座担当者は全て東京帝国大学の出身である。事実上、哲学関連分野だけではなく、法文学部のほとんどの教員は東京帝国大学の出身であった。一方、台北帝国大学の哲学関連講座の場合、大部分の教員が京都帝国大学出身者であることがわかる。

なぜこのような違いが現れたのか。それには二つの理由が考えられる。まず、教員の不足が挙げられる。1926年に開校した京城帝国大学は、開校前から教員任用にかなり苦労したといわれている[46)]。六番目の帝国大学であり、韓国最高の教育機関である以上、日本国内からそれに相

45）『台北帝国大学一覧』（台北帝国大学、1943年）から作成。

46）前出『紺碧遥かに』、49頁。

応する優秀な教員を招こうと努力がなされたのであったが、植民地大学という特殊な状況の下で求められる講義内容と各教員の研究分野・専門が異なる事態が往々にして発生した[47]。また、台北帝国大学開校の1928年には、すでにかなりの教員が京城帝国大学に流れている状態で、教員採用はより難しい状況だったのであろう。さらに、中国哲学分野の場合、1920年代は京都帝国大学の山路愛山および狩野直喜教授の受講生が学会で活動を開始する時期でもあった[48]。結果的に東京帝国大学出身者と共に京都帝国大学出身者が数多く台北帝国大学に赴任することになったと思われる。

ところで、人事権を持っていた幣原総長がどのようなルートを経て京都帝国大学出身者を教員として招くことができたのか。ここで注目される人物が初代文政学部長の藤田豊八である。藤田は1985年東京帝国大学漢文科の卒業であるが、同期生としてその後京都帝国大学の教授になる狩野直喜がおり、１年後輩が後に京都帝国大学で東洋史を教えた桑原隲蔵であった。彼らを通じて京都帝国大学から東洋および哲学分野で教員を紹介してもらうことができたと思われる。

結果的に、台北帝国大学の哲学関連講座には東京帝国大学出身者と京都帝国大学出身者の双方が存在しており、両帝国大学の学風が現れていたようである。呉守礼（1909-2005）は台北帝国大学の学風について次のように述べている。

> 大學的新鮮人大都不知天高地厚，先月旦起師長來。那時，台大的教授陣容顯示有兩個來源。一為：不是來自東京帝大就是京都帝大，另一來源就是在本土早已享受盛名的及年輕氣銳的少壯學者。土產的像醫學方面的杜聰明教授是例外。學制大致依照本國的帝國大學，以「講座」為中心。每個講座擔任教授一人，助教授或講師一人。一個講座或兩個講座共用助手或副手一人。不任官等的助手叫做副手。主任教授沒有移動，助教授無論有多大能力成績都升不上去。至少我個人的印象如此。
>
> 文科方面的教授陣容，東京帝大出身的與京都帝大出身的似乎旗幟鮮明，旗鼓相當。我沒有特別調查，只憑表面上觀察，東大派似乎偏於儒學、哲學。京大派比較實事求是。這是我初淺的觀察。例如：東京的「斯文」雜誌，京都的「支那學」雜誌在一段時期分別代表東京、京都的學風傾向，好像中國學術有「漢學」「宋學」的對立，經今古文學的區別。東京、京都兩派的學者會合在台北帝大共事，其間人事上有無摩擦，那是大人先生的事兒，我不得而知。不過有的人超然獨立，有的人喜好比較自我主張，那亦是人情自然的現象，不必厚非[49]。

47）金容徳「京城帝国大学（1924-45）の教育と韓人学生」（金容徳・宮嶋博史編『日韓共同研究叢書一二　近代交流史と相互認識Ⅱ』、慶応義塾大学出版会株式会社）134頁。

48）坂出祥伸『東西シノロジー事情』（東方書店、1994年）43-44頁。

49）従宜生「台北帝国大学与東洋文学講座」（『台大交友双月刊』、2001年11月）16頁。

東京大学の『斯文』と京都大学の『支那学』に代表される二つの中国哲学研究傾向は、学生の間でも膾炙されるほど明らかに分かれていたようである。このような傾向は、中国哲学分野だけではなく、他の分野でも現れていた特徴であった。歴史学分野においても、東京帝国大学出身の藤田豊八・村上真二郎・岩生成一・桑田六郎など、京都帝国大学出身の村上喜代三・小葉田淳・菅原憲などから両大学史学科の系統が台北帝国大学の史学科に継承されている。当時の台北帝国大学には、このような優秀な教授陣が集まり、さらに両大学の学派の特徴が融合調和して学術研究が行われていた[50]。

おわりに

京城帝国大学と台北帝国大学は、いずれも日本の植民地に建てられた帝国大学という特殊性を有している。本稿では設立期を中心として、植民地高等教育機関における日本の近代アカデミズムの流れを検討した。そして、両帝国大学の哲学関連講座の教員とカリキュラムの名称を比較し、どのような特徴を有していたのかを考察した。

両帝国大学は設立にあたって、豊富な教育経験と欧米への留学経験を有していた服部宇之吉と幣原坦をそれぞれ初代総長とし、教授任用と学風の確立の使命を与えた。服部は東京帝国大学での人脈を生かして意欲的に優秀な教員を招聘し、韓国の地理的・歴史的特性を有する「朝鮮史」「朝鮮語学朝鮮文学」講座と「支那文学」「支那哲学」講座を設けた。一方、幣原は長い教育行政の経験を活かし、人事だけではなく、各講座の性格にまで深く関与していた。積極的に南方政策を学術に取り上げ、「南洋史学」はもとより「東洋倫理学」「東洋哲学」など新しい範疇の講座開設を試みた。

このように、京城・台北帝国大学は、設立時期から日本国内の他帝国大学に比肩できるほど優れた教員と学生で構成された。しかし、両大学は研究機関としての役割は果たしていたが、教育の側面においてはその機能を十分果たすことができなかったように考えられる。ソウルと台北という特定の地域に設立されたにもかかわらず、韓国人及び台湾人の学生の入学は制限されるという矛盾をかかえていたことからもうかがえる。

京城帝国大学の教員の大部分は東京帝国大学出身が占めていた。支那哲学講座の場合、服部の人脈によって全教員が東京帝国大学支那哲学科の出身者（服部の先輩および後輩）で構成され、東京帝国大学支那哲学科の縮小版ともいえるものであった。これに対し、台北帝国大学の教員の構成は東京帝国大学出身者と京都帝国大学出身者の混成であり、それぞれの学風というものが現れ、相互的に融合調和していたようである。東京と京都帝国大学の両学風が台北帝国大学という一つの学問の場で共存していたことは興味深い。本稿では制度や人脈の考察が中心

50）欧素瑛『伝承与創新』（台北：台湾書房出版有限公司、2006年）224-225頁。

となり、東洋哲学分野における東京大学と京都大学出身者の研究傾向がどのようなものであったのか、両帝国大学における東洋史研究や中国学研究がどのように進められたのか、それは東アジアにおける近代アカデミズムにおいてどのような役割を果たしたのかなどについては深く扱うことができなかった。これらは今後の課題としたい。